

日本の展望委員会 基礎科学の長期展望分科会(第5回)議事要旨

【日時】 平成21年3月18日(水)10:00～12:30

【場所】 日本学術会議5-A(1)会議室

【出席者】 海部委員長, 谷口副委員長, 家幹事, 池田委員, 北澤委員,
平委員, 玉尾委員
事務局: 渡辺参事官 他

【議題】

- 1) 前回議事要旨(案)の確認
- 2) 中間報告・「第4期計画」への提言事項のとりまとめについて
- 3) 基礎研究の定義について
- 4) その他

【資料】

- | | |
|-------|---|
| 資料1 | 前回議事要旨(案) |
| 資料2 | 中間報告:審議の経過及び検討の論点整理 |
| 資料3 | 第四期科学技術基本計画に盛り込むべき緊急的な課題の提案 |
| 参考1 | 基礎科学の長期展望分科会 委員名簿 |
| 参考2 | 「日本の展望」作成の作業について(メモ) |
| 参考3 | 第1期～第3期科学技術基本計画の比較 |
| 席上配布1 | 基礎科学の長期展望分科会:ご意見問い合わせ3つ
(海部委員長からの依頼メール)
(第三期科学技術基本計画の記述)
(金澤会長による, 研究と種類の分類)
(研究の種類と分類 金澤会長からの追加資料) |
| 席上配布2 | 金澤会長の宿題「基礎研究の考え方」について
(海部委員長コメント)
(家委員コメント)
(谷口委員コメント)
(北澤委員コメント)
(玉尾委員コメント) |

議事に先立ち海部委員長から, 今回文科省の磯田学術振興局長にお越しいただく予定であったが急にご都合がつかなくなったので, 磯田局長との意見交換は次回以降に改めて設定したい旨, 説明があった.

議事

1) 前回議事要旨(案)の確認

第4回(2009.02.04)の議事要旨(案)が確認された。

2) 中間報告・「第4期計画」への提言事項のとりまとめについて

2.1 中間報告:審議の経過と論点整理について

海部委員長から、資料2にもとづき、3月16日締め切りで日本の長期展望委員会に提出した「中間報告:審議の経過と論点整理」の概要の説明があった。中間報告は現時点での論点整理という性格のものであり、そのまま対外的に出されるものではない。

北澤委員から、以下の4点についてコメントがあった。

- ① 学協会・学術出版への支援に関して: 政府は支援する意思はあるが分野によっては学協会が細分化されていてどこを支援すればよいのかわからないという側面がある。たとえば学術会議が方針を示せば支援は可能と思われる。学術誌の問題について学術会議では浅島会員が中心となって検討している委員会がある。
- ② 設備の老朽化について: 科学技術に関心のある国会議員は大学に視察に行って、最近は大学の設備が充実しているという印象を持っている。
- ③ 人材育成について: 理工系の大学院生が金融業界やコンサルティング会社など他分野に就職することを「文転」と表現して、人材育成におけるロスと見る風潮が大学側には未だにある。いろいろな分野への進出を大学側が推奨するようであればならない。
- ④ 継続的・系統的統計データの収集と分析充実について: 科学技術政策研究所が取り組んでいるが、アメリカなどと比較して人員も予算も圧倒的に不足している。提言で制度充実を強調すれば事態が改善される可能性があるのではないか。

これら4点について、意見交換が行なわれた。

① 学協会・学術誌の問題について

○学術誌の問題について、どれを支援して良いかわからないというが、たとえば韓国ではKOFSTで認定されれば支援が受けられるというようなシステムがあるが、我が国にはそのような評価システムがない。地球科学や化学分野のように、連合体を作って出版を担ってゆく動きも重要である。

○人文系や医学など、分野によって学協会が非常に細分化されている場合もある。

○全体にかかわることであるが、特に人文系は、学協会や研究発表のあり方、学位の問題にしてもかなり違っている。この分科会は「基礎科学の長期展望」であるが、そこに人文系の事情も織り込むかどうかで議論がかなり変わってくるのではないか。

○学術誌は学問が発展すれば自然発生的に発展するものではないか。

- そこは議論が分かれるところで、成果発表は外国の雑誌で良いではないかという意見もある。しかし、科学技術立国を標榜する我が国が自前の成果発信の場を持たないで良いというものではないと考える。今回の公益法人でも学術集会は考慮されるようになったが、出版はまだ配慮されていない。我が国は学術誌を育てるという視点が弱い。
- 浅島委員会に参加しているが、そこでも同様の議論がある。基本的考え方を据えた上でモデル編集体制を提案して、それに予算的支援を措置するなどの具体的提案を議論しているところである。
- 受け皿であるが、学術会議でどうやって欲しいということがまとまれば、ファンディング側も対応できる。
- 文系がどうして学会が数多くなるかというと、偉い先生がそれぞれ学会を作ってしまう面がある。それでは国際的に打って出ることも難しくなる。国際なプレゼンスは人文社会科学といえども重要な因子になる。
- 人文学の分野では研究発表は著書で勝負し、レフリード・ジャーナルというものを発表の場として認めていないところがある。カルチャーが全く異なる。
- 研究者が短い論文しか書かなくなった。がっちりした構成の本論文をどのようにして残してゆくのかは大事である。
- オープンアクセスの動きに対してどのように対処するかの問題もある。
- アジアの諸国が連合してアジアの学術誌を出そうという動きもあるが、日本としてどのように対応するか。分野によっても状況がかなり異なる。
- 英国の IOP は出版事業が非課税になっていて非常に上手くやっている。日本は公益法人であっても出版は非課税対象に認定されていない。

②設備の老朽化について

- 政治家の感覚は鋭いところもあって、昔の大学が貧乏であった状況に比べて今はかなり充実していることも事実である。ただ、せっかく作ったすばらしい装置が運転経費がないために活用できない状況派大きなロスである。
- 化学の分野では全国調査を行なってリユースを進めるという動きがある。

③人材育成について

- 大学関係者は、博士課程は後継者育成である、という感覚で来た。学位を取った人材がもっと広い分野で活躍することを奨励することが重要である。
- 理系の人材がマネジメントに加われば良くなるというものでもない、
- この問題には、社会が理系の人材をもっと広く受け入れて欲しいという側面と、大学側が学生をもっと広い分野に供給することを心がけるという両面がある。

④ 継続的・系統的統計データの収集と分析について

○例えば JST 費用を出す、といったことも考えられる。今後、緊急対応と長期的組織の両面で、具体的な方策を早急につめる。

2-2 第四期科学技術基本計画に盛り込むべき緊急的課題について

海部委員長から、資料3にもとづき、「第四期科学技術基本計画に盛り込むべき緊急的課題」の本分科会からの提案について説明があった。内容的には先の「中間報告：審議の経過と論点整理」とかなり重なっている。この段階では第一ステップとしていろいろな分科会からの提案を集めているものなので、資料3では、各委員から出された提案内容をあまり調整することなく列挙してある。

○北澤委員提案の部分で、「研究者になれずにいる人たちにも研究者として復帰してもらおう」という記述があるが、この点の根本原因が研究費の問題ではなくてポスト難の問題なのではないか。

○ここで言っているのはそういう意味ではなくて、中小規模大学などで研究費がろくにない状況が何年も続くと、研究意欲を失ってしまうという意味である。

○日本の場合、地域の大学からの論文がかなりの部分を占めると聞いたことがあるが、最近ではそれも変わってきているのか。

○地域の大学でも活発に活動しているトップの人については状況は変わらないと思うが、それ以外の中堅クラスの人たちが疲弊している。

○科学に対してなぜ公的支援がなされなければならないのかという記述が必要ではないか。

●この段階では、とにかく考えられる提案事項を挙げるということなので、表現の詳細にまでは神経が行き届いていない。さまざまな分科会からたくさんの提案が出てくると思われ、起草委員会で全体を整理することになる。最終版では当然表現にも気を配ることにしたい。

3) 基礎研究の定義について

海部委員長から、席上配布資料1のように、金澤会長から研究のカテゴリー分けについて意見照会があり、本分科会委員にメールで検討依頼したこと、これまでに届いたご意見(席上配布資料2)については、そのまま金澤会長にお伝えしてあること、が述べられた。また、金澤会長から追加の意見照会として、「基礎・応用・開発研究という3分類で、基盤研究と追加して4分類とすることについて」および「応用研究の中にレギュラトリー・サイエンスに関する記述を入れることについて」の2点があったことが述べられた。引き続き、家、谷口、北澤、玉尾各委員からそれぞれのコメントの趣旨の説明があった後に意見交換を行なった。

- 基礎と応用の間に「基盤的研究」を入れることはものごとを徒に複雑にする.
- 科学技術基本計画の冒頭にある「基礎研究」の意味, 特に「基礎研究に2つある」という言い方については違和感がある. 研究活動を恣意的に分断することにならないか.
- このようなターミノロジーの議論は不毛である.
- 哲学的な定義ならいろいろな見方があるということで済むが, 行政における言葉の使い方となると現実の予算配分が絡むだけに気をつけなければならない.
- 基礎研究を表すのに「自由な発想に基づく研究」という言い方がしばしば使われているが, それではトップダウンの基礎研究というのはいりえないということになる.
- 科学技術基本計画で重要だと謳っている基礎研究を, 具体的にどのように振興するのかという文脈で考えるべきである.

4) その他

次回(第6回)は4月24日(金) 10:00~12:00に開催することとした.

磯田学術振興局長のご都合が宜しければご出席いただいて意見交換を行なうこととする. 意見交換は

- ・基礎科学の振興について, 第四期計画向けも含めて文部科学省としての方向性, 基本姿勢, 主な政策について
- ・大型重点化政策(研究大学 30 拠点など)についての考え方, 今後の方向性について
- ・大型科学や科学政策策定において日本学術会議に期待する役割について

といったテーマを中心とする.

なお、7 月までの開催日程についても、事務局より調整メールを出していただく。